

2025. 6. 1

現代俳句千葉

157号

巻頭エッセイ

創立四十五周年を

受け継ぐ 会長 羽村美和子



千葉県現代俳句協会は、昭和五十五年五月十七日、現代俳句協会千葉地区協議会として発足しました。当初会員は六十二名で、全国的にも早期の立ち上げでした。以来今も活躍されている方も多く、お蔭で今年創立四十五周年を迎えました。

会報で既にお知らせしたとおり、総会と俳句大会をより密度の濃いものにしたと、今年度より春と秋に分離することになりました。

去る三月十六日には分離して初の総会・席題句会が行われました。今号に記載のとおり、今までより更に集中した熱の籠もった会になりました。また、四月三十日には千葉を飛び出て、東京谷中界隈での春の吟行会を行いました。句会場は一茶・山頭火ゆかりの本行寺(月見寺)、という贅沢さです。心豊かな時間を過ごすことが出来ました。

来たる十月十二日には、池田澄子氏に記念講演をお願いして「創立

四十五周年記念俳句大会」を開催する予定です。同封の投句用紙で沢山の皆さまにご参加頂きますようお願い致します。もちろん池田澄子氏にも選句をして頂くことになっています。

バラエティー番組の影響からか、昨今俳句ブームと言われています。また、ネット俳句などには若い方も多くおられます。しかし現代俳句協会のみならず、全国的に会員の数は減っています。本協会も一時期は五百五十名を越えましたが、現在は三百名を切るという寂しさです。

並木邑人前会長は、「俳句って楽しい！」というエッセイを前号に書いています。その楽しさを多くの方々とかち合い繋がっているのが、協会活動です。各自が所属している結社や雑誌の枠を越えて、新たな俳句の可能性に出会える場でもあります。一人でも多くの方に味わって頂きたく、俳友の方々へのお声掛けをお願い致します。ご一緒に創立四十五周年を受け継いでいきましょう！

目次

新会長あいさつ	羽村美和子	1
退任のあいさつ	並木 邑人	2
新役員紹介		2
令和七年度定期総会		3～4
令和七年度席題俳句大会		5
春の吟行会		6～7
諸家近詠		8～9
会員・会友の近況		9・14
私の感銘句		10～13
強化部だより		14
津田沼研究句会報告		15
青葉研究句会報告		15
柏研究句会報告		15
君津研究句会報告		15
いすみ安房研究句会報告		15
図書紹介・掲示板		16

千葉県現代俳句協会会報

退任のあいさつ

コロナ禍との闘い



千葉県現代俳句協会の運営について、有能な新たなリーダーに引き継ぐことが出来ました。図らずも会長職を二期六年も担ってきた者として、ひとまずは安堵しているところです。

この六年間で一番大きな出来事は、新型コロナウイルスの蔓延でした。想定外の事象に世界中が翻弄され、多くの犠牲者を出してしまいました。少なくとも当協会では最小限に留まってくれたものと思います。しかしその行事内容には多大な影響を及ぼし、人と人が接触する時間の最小化を図ることがシビアに求められました。

周到に準備した令和二年三月の創立四十周年記念俳句大会の中止、令和二年度から四年度の総会の中止、俳句大会は事前投句部門に限定し、吟行会も披露を省略するなど、最低限の時間に圧縮して漸く実施してきました。

なおその他の四十周年事業としては『千葉
県現代俳句集成二〇二〇』を令和二年五月に
刊行し、四十周年記念基金では目標額の百万
円を上回る金額を達成することができました。

前会長 並木 邑人

困ったことは、協会の規約に緊急事態を想定した規定がないことでした。総会を開くことが出来ない事態など、規約は想定していません。頼れる唯一の条文が、最後の第二〇条「本規約に定めのない事項は、幹事会の決定による。」というものでした。

これを頼りに非常事態における協会規約の弾力的な運用を図るべく、総会委任状及び役員による書面決議を以て採決することとした。また令和四年度は役員の改選を予定していたため、役員に加えて総会出席予定者にも書面決議をお願いした次第です。このような運営がベストとはとても言えませんが、コロナ禍の最中では精一杯の努力はしたつもりです。そもそも俳句の世界では、想定外の表現を歓迎する筈ですから、もう少し時間が経てばユニークな俳句としても表現できるかも知れません。近頃の安易な傾向に流れ易い俳句、言葉の意味にのみ寄りかかった俳句に活を入れていただきたいと思います。

四国のお遍路さんの菅笠には「同行二人」の文字が書かれ、弘法大師の存在が常に意識されています。人格と法人格の違いはありますが、現代俳句協会もそんな存在になれるのではないかと時折夢想しています。

千葉県現代俳句協会新役員

(令和七～九年)

會長	羽村美和子
副會長	高橋健文 高橋宗史 長井寬
幹事長	木之下みゆき 白木暢子
副幹事長	石井稔 岡田春人
事務局長	東國入
事務局次長	遠藤寛子
會計幹事	松本千花
幹事	石井恭平 川上典子 小林崑七
	篠田京子 鈴木瑩子 藤好良
	松村五月 三宅たくみ 森須蘭
監查役	並木邑人 野口京子
顧問	秋尾敏 伊藤希眸 内田庵茂
	塩野谷仁 高木一惠 武田伸一
	徳吉洋二郎 檜垣梧樓 山崎聰
	山中葛子 渡辺澄
參與	伊与田すみ 上野紫泉 小野功
	越野雄治 小林実 小張直子
	清水伶 下村洋子 高野春子
	直江裕子 長濱聰子 林ゆみ
	星野一恵 増田豊子 森井美恵子
	矢野忠男 山崎幸子

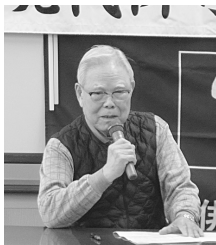


徳吉洋二郎 前副会長



並木 邑人 前会長

お世話になりました



議長 柴田洋郎さん



羽村美和子 新会長

令和七年度
定期総会・席題俳句大会開催される

令和七年三月十六日（日）、千葉市民会館にて令和七年度定期総会・席題俳句大会が開催された。

今年度より春に総会と席題句会、秋に従来の俳句大会と、分離して行われることになり、初めての試みとなった。

定期総会は、羽村美和子幹事長の総合同会のもと、十二時に開会。徳吉洋二郎副会長の開会のことば。並木邑人会長の挨拶に続き、柴田洋郎氏を議長に選出。総会では会員参加三十七名、委任状一四一名定数を満たし成立した。総会では六議案について審議され、全ての議案を可決。長井寛副会長の閉会のことばで終了した。（東 國人記）

〔第1号議案〕

令和6年度事業報告

1. 行 事

(1) 定期総会・俳句大会

- ① 令和6年度総会 3月17日（日） 出席者 48名
会場：千葉市文化センター
- ② 同上 俳句大会 同上 参加者 63名
会場：同上
顕彰 事前投句の部 応募数 938句
顕彰 高校生の部 応募数 810句

(2) 吟 行 会

- ① 春の吟行会 4月21日（日） 参加者 48名
吟行地：千葉市動物公園 会場：千葉市民会館
- ② 秋の吟行会 10月27日（日） 参加者 24名
吟行地：上総国分寺跡・上総国分尼寺跡 会場：市原市市民会館

(3) 研 究 句 会

- ① 津田沼研究句会 毎月第2火曜日 13時～16時
津田沼1丁目町会会館（2句事前投句） 12回実施
- ② 青葉研究句会 毎月第4木曜日 13時～16時
千葉市民会館（3句事前投句） 12回実施
- ③ 柏研究句会 毎月第2土曜日 13時～17時
柏市・ハックルベリー書店2階（7句当日投句） 11回実施
8月は夏休み
- ④ 君津研究句会 毎月第1木曜日 13時～16時
君津市生涯学習交流センター（3句事前投句） 12回実施
- ⑤ いすみ・安房研究句会 奇数月第4日曜日 12時30分～15時
勝浦観光協会2階（5句事前投句） 5回実施

(4) 青年部活動

夏雲システムによる句会（あしたば句会）
1月28日、3月31日、7月28日、9月29日
吟行会 5月19日（葛西臨海公園）、11月30日（東京スカイツリー）

(5) 初心者講座（第2期）

4月20日開講 年10回（年度内8回済）千葉市民会館

2. 幹 事 会 等

定例幹事会

- 第1回 1月23日（火） 船橋市勤労市民センター
第2回 5月21日（火） 同上
第3回 8月20日（火） 同上
第4回 11月19日（火） 同上

3. 会報の発行

- 第152号（3月1日刊）
第153号（6月1日刊）
第154号（9月1日刊）
第155号（12月1日刊）

4. 会 員 数 等（令和6年12月31日現在）

会員 250名 会友 38名 計288名

【主な異動】

＊入 会 18名

新会員（7名）鈴木卯ノ花 座間 等 歌代 美遥 江良 純雄
渡辺 遊山 長島雅余之 中村 兼子

転入会員（2名）正山オグサ 浅野 浩利

新会友（9名）置鮎 隆一 天野 清昭 阿部さくら 大川佐多子
福山ヒデ子 三谷 徹 岳 和子 徳田 悠子
本吉万千子

＊退 会 22名（会員 18名 転出会員 1名 会友 3名）

内、物故者 会員 2名 松本 静顕 久保 筑峯

[第2号・第3号議案]

令和6年度の会計報告

[令和6年1月1日～12月31日]

収入の部

(単位：円、%)

科 目	予算額 (a)	決算額 (b)	対比 (b)/(a)	摘 要
俳句大会	550,000	525,000	95%	
吟行会	100,000	72,000	72	春・秋2回 秋欠席投句なし
協会運営	570,000	666,067	117	本部よりの助成金、会友費他
合 計	1,220,000	1,263,067	104	

支出の部

(単位：円、%)

科 目	予算額 (a)	決算額 (b)	対比 (b)/(a)	摘 要
総 会	240,000	151,688	63%	
俳句大会	416,000	361,979	87	チラシ・作品集 高校生の部
吟行会	85,000	52,744	62	春・秋2回
会報発行	590,000	480,683	81	年4回発行
協会運営	305,000	129,861	43	
強化部	37,000	23,234	63	会員増強 青年部
予備費	100,000	0	0	
合 計	1,773,000	1,200,189	68	

次年度繰越金

(単位：円)

当年度収支差額	62,878
前年度繰越金	1,445,763
次年度繰越金	1,508,641

財産目録

(単位：円)

普通預金	1,199,439	千葉銀行稲毛東口支店
現金	309,202	
合 計	1,508,641	

監査報告書

令和6年度の会計及び事業の執行状況について監査した結果、すべて証票書類と一致しており、正当に処理されていることを確認しました。

令和7年1月21日

監査役 矢野忠野

[第4号議案]

令和7年度事業計画(案)

1. 行 事

- (1) 定期総会・席題句会
令和7年度総会・席題句会 3月16日(日) 千葉市民会館
- (2) 俳句大会
創立45周年記念俳句大会 10月12日(日) 千葉市文化センター(高校生の部含む)
記念講演 池田澄子氏
- (3) 吟行会
春の吟行会 4月30日(水)
吟行地：台東区谷中界限 句会場：本行寺(月見寺)
秋の吟行会 未定
- (4) 研究句会
① 津田沼研究句会 毎月第2火曜日 13時より
津田沼1丁目町会会館(2句事前投句方式)
② 青葉研究句会 毎月第4木曜日 13時より
千葉市民会館(3句事前投句方式)
③ 柏研究句会 毎月第2土曜日 13時より
柏市ハックルベリー書店(7句当日投句方式)
④ 君津研究句会 毎月第1木曜日 13時より
君津市生涯学習交流センター(3句事前投句方式)
⑤ いすみ・安房研究句会 勝浦観光協会2F(5句事前投句方式)
- (5) 青年部活動
夏雲システムによる句会(あしたば句会) 1月19日 3月 7月 9月
吟行会 5月 11月
- (6) 初心者講座
第3期 4月19日(土) 開講 年10回 千葉市民会館

2. 幹事会

- 定例幹事会 船橋市勤労市民センター
第1回 1月21日(火) 第2回 5月20日(火)
第3回 8月19日(火) 第4回 11月18日(火)
臨時幹事会 4月1日(火) 船橋市勤労市民センター

3. 会報の発行

- 第156号 (3月1日刊) 第157号 (6月1日刊)
第158号 (9月1日刊) 第159号 (12月1日刊)

[第5号議案]

令和7年度予算(案)

[令和7年1月1日～12月31日]

収入の部

(単位：円)

科 目	予算額	前年度予算額	前年度決算額	摘 要
俳句大会	600,000	550,000	525,000	事前投句料 大会参加費
吟行会	100,000	100,000	72,000	春・秋2回
協会運営	530,000	570,000	666,067	本部助成金 会友費
強化部	60,000	0	0	初心者講座
創立45周年特別事業費	700,000	0	0	基金
合 計	1,990,000	1,220,000	1,263,067	

支出の部

(単位：円)

科 目	予算額	前年度予算額	前年度決算額	摘 要
総 会	124,000	240,000	151,688	
俳句大会	465,000	416,000	361,979	チラシ・作品集 高校生の部
吟行会	85,000	85,000	52,744	春・秋2回
会報発行	576,000	590,000	480,683	年4回
協会運営	205,000	305,000	129,861	
強化部	54,000	37,000	23,234	会員増強 青年部 初心者講座
創立45周年特別事業費	600,000	0	0	記念式典費
予備費	100,000	100,000	0	
合 計	2,209,000	1,773,000	1,200,189	

次年度繰越金

(単位：円)

当年度収支差額	- 219,000	- 553,000	62,878
前年度繰越金	1,508,641	1,445,763	1,445,763
次年度繰越金	1,289,641	892,763	1,508,641

令和七年度 席題俳句大会

席題「燕」「詰」

席題俳句大会は、午後二時から、高橋健文副会長の開会のことばで開始された。参加者は、顧問二名を含めて三十七名。披露・点盛・集計と進められ、各特別選者の講評、成績発表・表彰と予定通りに進み、木之下みゆき副会長の閉会のことばで終了した。

大会成績、及び、参加者の作品は左記の通り。

(東 國人記)

へ一位く十五位までの入賞作品

- ① 燕来る村へ雨戸を開けに行く 石井紀美子
- ② 燕来る詩と詩のはさま潜り抜け 平岡 育也
- ③ 言語野を縦横無尽つばくらめ 長井 寛
- ④ 燕にもシングルマザー風を切る 羽村美和子
- ⑤ 遣伝子の縦に詰まりし葱真白 下村 洋子
- ⑥ 詰め甘きアダムとイブと蛇の夢 小林 崋七
- ⑦ 膝詰め of 停戦論議春灯 並木 邑人
- ⑧ 家内制手工業にて詰める春 遠藤 寛子
- ⑨ 燕来る明日は西から雨といふ 高橋 健文
- ⑩ 受動的位位置から詰める恋の猫 野口 京子
- ⑪ 再来を祝う人なき燕かな 高橋 博
- ⑫ 春霞を詰めたる味の御味噌汁 増田 豊子

⑬ 詰将棋Aー解けぬ目借り時

大庭 芳郎

⑭ たんぼの野に詰め寄りぬ正論を

森井美恵子

⑮ これしきで詰んではならぬ卒業す

吉田 耕史

〈特別選者特選句〉

(並木邑人 特選)

平岡 育也

燕来る詩と詩のはさま潜り抜け

平岡 育也

(秋尾 敏 特選)

石井紀美子

燕来る村へ雨戸を開けに行く

平岡 育也

(高木一恵 特選)

平岡 育也

燕来る詩と詩のはさま潜り抜け

平岡 育也

(高橋健文 特選)

平岡 育也

燕来る詩と詩のはさま潜り抜け

木之下みゆき

詰問は自己愛春は曙

木之下みゆき

(徳吉洋二郎 特選)

羽村美和子

白詰草QRコードに紛れ込む

平岡 育也

(長井 寛 特選)

平岡 育也

燕来る詩と詩のはさま潜り抜け

白木 暢子

桜鯛夢と香草詰めこんで

小林 崋七

(羽村美和子 特選)

柴田 洋郎

詰め甘きアダムとイブと蛇の夢

置鮎 隆一

〈その他の作品〉

置鮎 勝美

料峭や身丈も詰まるきのふけふ

福田志津子

またぞろのシニール政治や燕去る

鈴木 瑩子

開幕は大谷めざし詰め放題

鈴木 瑩子

物価高あれこれ詰めて春彼岸

鈴木 瑩子

蛙とぶせつば詰まりし大東京

鈴木 瑩子

国道の長距離ランナー抜く燕
魂の居どころ忘れない燕
たつぷりと愛を詰めこみ蛙鳴く
初燕東の空が開いてます
コンビニの看板の上燕来る
五手で詰む4三のと金春光す
来る燕消えたる「飛燕」戦闘機
軒下の憂き世の欠片燕返し
思い出と希望を詰めてシャボン玉
能登に詰まる異形の世界能登の春
穴開けて斜めのピンゴ燕飛ぶ
ご馳走を落としてくれし燕の巣
緋毛氈重箱詰めて花見酒
春色を詰め込むための旅靴
お届け物です春風の瓶詰です

高橋 宗史
高木 一恵
岡田 春人
星野 一恵
三宅たくみ
秋尾 敏
東 國人
池田 幸
徳吉洋二郎
藤好 良
石井 稔
つくしんぼ
横山 郁子
松村 五月
森須 蘭



特選賞総なめ
平岡育也さん



羽村会長と
特選賞の小林崋七さん

春の吟行会

寺と坂のある街「谷中界隈」

会場 本行寺 令和七年四月三十日(水)



本行寺山門

が眠る谷中霊園があつたり、下町の風情をしつかりと残した谷中ぎんぎ商店街と様々な魅力があふれる場所であつた。昨今のインバウンドの影響か、どこに行っても外国人観光客の姿が、多々見られた。これも、今の東京を象徴的に表しているのであろう。

谷中の街並みからの句は、

春惜しむ無声映画のごとき街 高橋健文
陽炎や江戸へ落ち込む崖の端 鹿兒嶋俊之
また、朝倉彫塑館を詠んだ句としては、

彫像の体幹確と夏に入る 木之下みゆき

目高入れたき朝倉邸の植木鉢 松本千花
風光る彫塑の猫の妙の文字 白木暢子

谷中霊園を詠んだものには、

葉桜や開けつ広げの谷中墓地 佐藤禎子
霊園はいにしえ忍ぶ初夏へ 尾上康子

さらに、谷中ぎんぎ商店街の風景からは、

昭和の日炎小暗き煎餅屋 石井 稔
青い目や谷中銀座のかき氷 加賀谷秀男
などの句があつた。

十三時から、受付開始。会場は本行寺の本

山頭火句碑

ほつと月がある
東京に来てゐる



一茶句碑

陽炎や道灌どのの
物見塚



堂大広間。本行寺は、小林一茶や種田山頭火にも縁のある寺で、本堂前には、一茶と山頭火の句碑が向き合うように建っている。

新樹光一茶の句碑は自然石 徳吉洋二郎
語り合ふ対座の句碑や風薫る 加茂二行

加茂一行氏は、この寺のご住職でもあり、現代俳句協会の会員でもある。毎年十一月に「一茶・山頭火俳句大会」を開催されている。参加者は、四十名。投句は属目二句。

十三時三十五分より、羽村美和子会長から挨拶。続いて、加茂一行氏の挨拶を経て、選句に移り、続いて披露となった。集計の間に各特別選者からの選評が行われ、表彰を経て無事終了。十七時に解散。和気藹々とした楽しい吟行会であつた。また、本行寺様から地元の銘菓を頂戴した。お心づくしに深謝。

写真…石井 稔

披露…並木邑人・森須蘭・野口京子

(東 國人記)

吟行会当日は日暮里駅北口外NEW DAY S前に九時四十五分に集合。快晴。薫風。絶好の吟行会日和となった。駅の真ん前に会場となる本行寺の堂々たる山門がそびえ、我々を出迎えているようだった。皆は、それぞれお目当ての方向にどんだん足を運んでいく。皆さん、私より高齢な方も多いというのに、本当に健脚揃いで大変驚いた。

谷中は、まさに谷の街。坂を中心に人々が暮らしているような街。そして、寺の街。また、朝倉彫塑館や岡倉天心記念公園、寺町美術館や少し離れた場所には、子規庵といった文化の香り高い場所もあれば、多くの著名人

〔一位く十八位入賞者作品〕

- ① 惜春や時代の窪みにある谷中 森須 蘭
 ② 新樹光一茶の句碑は自然石 徳吉洋二郎
 ③ 春惜しむ無声映画のごとき街 高橋 健文
 ④ 多言語に揉まれ谷中の薄暑かな 保坂 末子
 ⑤ 昭和の日炎小暗き煎餅屋 石井 稔
 ⑥ 「墓守」の静かなる笑み夏館 並木 邑人
 ⑦ 葉桜や開けつ広げの谷中墓地 佐藤 禎子
 ⑧ 陽炎や江戸へ落ち込む崖の端 鹿兒嶋俊之
 ⑨ つつじ満開一茶を見上ぐ山頭火 東 國人

羽村会長 あいさつ

徳吉顧問 選評



並木監査役 選評



本堂での句会

⑩ 彫像の体幹確と夏に入る

木之下みゆき

〔その他作品〕

はつなつや坂の上まで一無尽 うなかみ宙

蛙啼く一茶宿りし月見寺 長井 寛

目高入れたき朝倉邸の植木鉢 松本 千花

春暑し谷中ぎんざをジグザグに 野口 京子

風光る彫塑の猫の妙の文字 白木 暢子

群青色の鼻筋通る涅槃像 小林 崑七

影重さなる谷中ぎんざの藍日傘 石井紀美子

華鬘草谷中の路地の洋画塾 歌代 美遥

空襲から逃れし家並風薫る 吉田 耕史

夏蝶となり谷中の銀座右往左往 星野 一恵

万緑や谷中の寺院凄すぎる 小川トシ子

晩春の噴き出しやまぬ子規の庭 遠藤 寛子

飛びたたんばかりに谷中の胡蝶花 安田 政子

物言わぬブロンズ像語り出す夏の空 尾上 康子

坂坂谷中だんだん春暑し 薦澤佐智子

水は噴水に朝倉彫塑館 藤田 富江

谷中青葉山頭火の影だんだんに 羽村美和子

もみじ若葉自然に学ぶ美の極み 金子 未完

風桜牧野博士は96才 山崎 公子

墓は慶喜イタリア人春愁 秋尾 敏

〔特別選者特選句〕

(羽村美和子会長 特選)

「字蚩沢」防犯カメラ作動中 林 昭雄

(長井 寛 特選)

春惜しむ無声映画のごとき街 高橋 健文

(高橋健文 特選)

惜春や時代の窪みにある谷中 森須 蘭

(木之下みゆき 特選)

彫り深き夏「若き日のかけ」に詩 山口 明

(秋尾 敏 特選)

地からタンポポ死者の靈舫う 木之下みゆき

(並木邑人 特選)

昭和の日炎小暗き煎餅屋 石井 稔

(徳吉洋二郎 特選)

木之下みゆき

彫像の体幹確と夏に入る

諸家近詠

石井紀美子

流木の白き骨もて初焚火
風去りて風の残りを抱く牡丹
かき氷くずしていけば昭和なり
寒紅を濃くす鏡中から他人

高橋 宗史

風花やいつも鬼なるかくれんば
早咲きを幻として花三弁
春の雪愚かに愚者のぼくに降る
装丁は妻の織物春の雪

富田 茂

庭梅の枯れ木に露の花が咲く
手土産は芥子菜漬けよ即乾杯
梅三分白く浮き立つ夕暮れに
春の雪待ち焦がれてる大船渡

下村 洋子

河骨や母は手の鳴る方へゆき
きつね花いまだ絶えざる人柱
今日もまた檸檬のような嘘をつき
枯野ゆく座頭市なら蟹股で

清水 伶

花まんさく夢のあとさき雨降って
雨合羽着ているきつね完市忌
カフカ全集ほころびてあり鳥雲に
初蝶のひらひら白紙委任状

高橋 健文

気がつけば世を斜に見て冬の賜
俳句とふ毒また葉六林男の忌
雑煮餅世におもねらず逆らはず
屋根歩く鴉冬麗がよく似合ふ

白木 暢子

徒然のことのお詫びに春が来た
蜻蛉生まれる長崎の指の先
伸びた髪一括り過去は忘れる
くしゃみする一人ひとりに詩の言葉

鈴木まんぼう

さくらさくら見え隠れする不発弾
始祖鳥の夢を横切る熱帯夜
みみず鳴く武人埴輪のうす笑ひ
再稼動許すな狐火ひたひたと

菅ノ谷文子

黄落期ブレイクダンス弾けおり
わくわくの空を手にする親子凧
鮫鰐やざつくばらんの鍋囲む
意に適う風を待ちおり親子凧

鈴木卯ノ花

指先に絵の具の記憶冬木の芽
凧がつま先立てて駆けてゆく
ヒヤシンス野蛮な君といて楽しい
三月は形状記憶の顔でいる

鈴木 一行

啓蟄のからだを柔らかく曲げる
遠足の列先生に守られて
賛美歌のようなる月のひかりかな
手袋の両手が車椅子を漕ぐ

多胡たかし

寒昂生あるものに永遠のなく
蒼天の深さ冬芽のあきらかに
寒明けて森羅万象うごきだす
鎌倉にもどる寒さや実朝忌

佐久間眞城

俺お前同じ浮寝の浜千鳥
春泥を浴びて優勝對抗馬
海の街弧灯ちらちら初時雨
赤々と百壽人生初日かな

柴田 洋郎

春の夜半ピリー・ホリデイ噓せてゐる
三十六計走るに如かず雉
花あしび二上山に眠る君
AIの鳴き声聞かせ初音聞く

千葉 信子

糸を切るだけの小鉢去年今年
年頭の屋上を這ふ水道管
大寒や横断歩道の時間軸
蛇穴を出るや日輪海を脱ぐ

鈴木 房州

雛の夜や回診女医の京訛り
夏負けを空也の瘦せと医師褒める
優勝ぞ二ワトリ貰ふ草相撲
聖夜みてタイムトンネル抜け出せず

鈴木 瑩子

壁に守宮できないことがまたひとつ
ほがらかな日暮甘藷の蒸しあがる
銀漢やきみもおいでよ羽つけて
合わせ鏡白い八月佇っている

佐藤 禎子

ミサンガの手首に緩し二月尽
シマフクロウ記憶をたどるため瞑る
水深の目盛は赤し鳥帰る
あたたかや偉人の列にココ・シャネル

椎名 鳳人

人間を逃げずに草をただ巻る
病む妻へはやる雪解の雫音
雪が雪を被りて能登の音を消す
春泥を桂馬跳びして速達来

澤田 壽一

無軌道の轍非情の青き踏む
ソーダ水ギヤップを捻る豆絞り
寺町のゆとりの中を赤とんぼ
老犬の好きを嫌いに寒卵

重田 忠雄

一言に勝る沈黙亀鳴けり
出目金のこの世彼の世を知り尽す
父母未生以前の私青大将
立読みは昭和の遺産文化の日

近藤 幸子

奥つ城や手入れとどかぬ躑躅咲く
蟬鳴きて耳鳴りにふつと穴の開く
春のカフェ主婦の持ち寄る笑顔かな
小ぬか雨沐浴してゐる芽吹きかな

島 隆史

パトカーを追いつ越してゆく春の雪
コーヒーを温め直す春の雪
恐竜の卵が座る春の宵
もう一度生まれ直すか春の雲

高桑婦美子

はじまりは終りの一夜花の宴
行く末にいつもこの世の飛花落花
桜咲く巧みの散らない花なるか
桜花ちるちるみちる我が楽土

寺田 勝子

ファックスを詰まらすレシピ花山椒
骨なしの鯖焼くどこまでも不器用
八月の思い届かずワルキューレ
ささくれを噛みきって年改まる

高野 春子

どの独楽も澄みジオラマの招き猫
顔なしと歩くジブリの森時雨
まだ墓の無き骨壺とゐる良夜
葱買ひににんげんのこゑ聴きたくて

篠田 京子

初夏の海風翼生えて来た
雲海でフロイトの舟見失う
煙突の完全犯罪夏の雲
闇魔蟋蟀地球丸ごと喰ってやる

徳吉洋二郎

人日や明日の視える窓磨く
いつの間の原発回帰残る虫
鬱の字を解体したる残暑かな
東京のでこぼこの闇螻蛄鳴けり

富澤さち子

昇格の知らせ山茶花開き初む
注文はソイラテ花の雨ならば
ジャスミンの花蔓なにを掴まえる
花菜土手いっきに加速する齡

高木 一恵

短詩わが銀河にそよぐしのぶ草
天空に裏道はなし白鳥来
昭和百年兜太『百年』梅ひらく
老々散歩蟻の逆立ちなども見つ

《会員・会友の近況》①

・千葉現俳十年間の業務を終えた。皆さんに俳句を楽しんで貰うことを第一に考えてきた。これからは、自分の俳句を楽しむ時間になりたい。(徳吉洋二郎)

・腰に激痛があり、二十度の寒暖差は堪え兼ねております。(菅ノ谷文子)

・この春転居。長女の進学、長男の転校があり慌ただしい日が続いています。ゆっくり読書する時間が欲しいです。

(鈴木卯ノ花)

・左手の指の痺れと痛み悩まされ、医師の診断を受けたところ、「手根管症候群」と言われ、治療中なるも更に痛みが腕全体に飛び火、難儀しています。清水公園は桜満開と言うのに。(椎名 鳳人)

・普段は齡を忘れたように動いておりますが、先日迂闊にも流行り病にかかりました。確実に齡の途上を自覚しました。

(鈴木 瑩子)

・句会も社会への参加も遠くして身の回りの日常だけになってしまいました。ただ目が情報を欲しがり思いはあちこちに飛びます。老いもまた楽し、です。

(高桑婦美子)

・2025年にローマに行く、良いことがあると聞きました。今年は25年に一度のジュビレオ「聖年」の年なのだそうです。是非イタリアに行きたい！イタリア語学習のアプリを続けています。まだ会話を聞き取るには程遠いのですが、少しずつ単語が耳に入るようになって、問題のフレーズが少しわかるようになりました。何事も継続ですね。俳句も継続あるのみ！(白木 暢子)

私の感銘句

福浦 村民

作者名 号頁

秋茄子ずっと戦後のまゝでよい

吉岡 一三 155 4

何処からか飛んで手の中夕蛸

元橋 孝之 155 4

不器用だけどほづきは鳴らせませす

宮本美津江 155 4

銀河には顔覚えなき父の居る

山崎 幸子 155 4

よく動く奏者の肩やクリスマス

安井 三緒 155 5

嫌いでしょ開口一番春疾風

山崎 公子 155 5

秋灯や一人芝居の椅子一つ

天野 清昭 155 5

松村 五月

名月に潰されさうな空き家かな

渡部 健 152 2

白菜や母の高さで塩を振る

秋谷 菊野 152 3

普通の木に普通の鳥の来て日永

黒澤 雅代 152 4

尾の記憶微かにありてみどりの夜

下村 洋子 153 8

たましいのはじめのみどり芹薺

清水 伶 153 9

寒鯉の捌かれていく重さかな

鈴木 一行 153 9

風ありや無きや木屋が近い

高橋 宗史 154 2

中嶋 三雄

乱丁の少女期ボインセア真つ赤

小野富美子 152 3

人間が蝶々になれる試着室

金子 未完 152 4

春暁やデラシネの青き旅立ち

土肥 勲 152 5

人民はいつも犠牲や流れ星

内田 庵茂 153 8

王女のひかがみを出で瑠璃蛸蝶

清水 伶 153 9

思いきり回転ドアを押せば夏

星野 一恵 154 3

銀河には顔覚えなき父の居る

山崎 幸子 155 4

人民はいつも犠牲や流れ星

内田 庵茂 155 4

著名な、大國の皇帝・大統領や革命指導者の名が浮かぶ。また遠い過去のことだけではなく、

現在も、である。何十万、何百万、或は千万以上の庶民の犠牲が生じる。「流れ星」には追悼と平和の願いが託されている。

椎名 鳳人

干柿のこの甘さ祖母連れて来る

岡田 春人 152 3

会果てる傍らにある冬さくら

荒木 洋子 152 4

雪催い匂い立つまで刃物砥ぐ

下村 洋子 153 8

下萌や幼心をくすぐりぬ

菅ノ谷文子 153 8

煩惱の捨て所なく懐手

鈴木まんぼう 153 8

A Iの軽やかに曳く蜘蛛の糸

高木 一恵 153 8

わがことを叱るわれ在り冴返る

高橋 宗史 154 2

干柿のこの甘さ祖母連れて来る

岡田 春人 154 2

洪柿の皮を剥いで縄状の紐に括り、ぶら下げる。寒風に晒して天日に晒すと極上の甘味を醸し出す。鄙びた家々の軒に簾のように吊るされている景は郷愁を誘う。その干柿の甘味が祖母の佛を連れて来るのであった。

國分 三徳

裸木やどこで落とした知恵袋

泉 志眞子 152 3

石楠花の寺に移した住民票

澤田 寿一 153 8

吊るし雛褒めつつ脈をとるナース

鈴木 房州 153 9

梟の眼のなかにある動けない

千葉 信子 154 2

月におります電話に出られせん

浪岡 玄 154 3

たくさんの指紋のこした蠅叩

袴田 菊子 154 3

薫風のペダルの重さ誕生日

富澤さち子 155 4

裸木やどこで落とした知恵袋

泉 志眞子 155 4

近頃、物忘れが多いし頭の回転もよくない。佳句も作れなくなった。歳はとりたくないなあ。いつから、こう頭が弱くなったのだろうか。

どうやら、どこかで知恵袋を落してしまっただけらしい。裸木になるのは淋しい。

北野 耕兵

森の婚はじまる烏瓜の花

石井紀美子 152 5

轉りのなかあざやかな人嫌

塩野谷 仁 153 9

馬の目に逃水見えているかしら

並木 邑人 154 2

しゃばん玉天上はとも自由席

徳吉洋二郎 154 2

たくさんの指紋のこした蠅叩

袴田 菊子 154 3

この先の不安をかくす夏帽子

森 孝子 155 5

秋の蜘蛛文士は糸を吐き続け

木之下みゆき 155 5

この先の不安をかくす夏帽子

森 孝子 155 5

夏帽子の不安隠しはすぐ消失しますよ

でも

人間界は不安ばかりかなあ

夏帽子を目深に被り 滑舌を良くしますか

夏帽子を目深に被り 滑舌を良くしますか

《生麦 生卵》《隣の客はよく柿食う客だ》

大口の早口言葉で不安解消したいです

山口 彩子

ヴィーナスの幻肢シャインマスカット

池田 博臣 152 2

二人づれとは永遠の春景色

渡辺 澄 152 3

鈍色の地震の薔へ雪しんしん

渡辺 竹庵 152 5

春光のなかの野鯉や兜太の忌

清水 伶 153 9

梟の眼のなかにある動けない

千葉 信子 154 2

月見草きのうの錆びた昼がある

羽村美和子 154 3

銀河には顔覚えなき父の居る

山崎 幸子 155 4

鈍色の地震の薔へ雪しんしん

渡辺 竹庵 155 4

亡夫の望みだった能登の旅を娘と二人で巡ったのは、もう八年も前の事だった。あの思い出の能登はどこへ行行ってしまったのか。復興まま

ならぬ映像に思いを馳せるこの句は心底いたま
しさを感ぜさせるのだ。

近藤 幸子

名月に潰されさうな空き家かな
人間が蝶々になれる試着室
初詣心の扉開けに行く
煩惱の捨て所なく懐手
雪催い匂い立つまで刃物砥ぐ
思いきり回転ドアを押せば夏
渦沼晩照影絵となりぬ蜩舟
思いきり回転ドアを押せば夏
星野 一恵 154 3
中山 皓雪 154 3

古い建物の重い回転ドアを「ぐいつ」と押し
て外に出た時、猛暑ではあっても冷房の中にい
た体は心地よく感じる。目前には夏の風景が広
がっている。瞬間の捉え方が妙。勢いのあると
ころが、夏に相応しく素的です。

小林 実

手榴弾クーラー効いた展示室
萩の雨ねずみ泣きする博多帯
福笑い五臓六腑は非対称
極楽でも地獄でもなく日向ぼこ
轉りのなかあざやかな人嫌い
しゃばん玉天上はどこも自由席
合飲の花眠りしあとも微熱して
萩の雨ねずみ泣きする博多帯
泉 志眞子 154 3
中村 冬美 154 3
鈴木まんぼう 153 8
塩野谷 仁 153 9
徳吉洋二郎 154 2
しつとりとした句、ねずみ泣きするが良いで
すし季語の萩の雨がすばらしい。私のなかでは
百点満点の句でした。

石井 稔

鳩に道ゆづったりして聖五月
空つぽになりたし雨は暖かし
蚕豆の床に転がる静かな日
不器用たけどほづきは鳴らせませす
ひとり飯食う記憶八月十五日
老いながら半透明に晩夏逝く
白紫陽花うそつく前の深呼吸吸
鈴木卯ノ花 155 5

置鮎 隆一

小春日や半熟卵のごとく居る
あぶくがひとつ赤い金魚の嘘ひとつ
デジタルの都会は積木鮫動く
たましいのはじめのみどり芹薺
全開の深夜のシャワー春愁い
だしぬけに月が綺麗と言はれても
熱を吐く天の歯ざしりカンナ燃ゆ
森 孝子 155 5
デジタルの都会は積木鮫動く
鈴木 瑩子 153 8

デジタルは1と0の組合わせ、都会のビルは
高層化され危なっかしく積木のようで、そのビ
ル群の隙間を鮫のように食するように忙がしく人々
が働く情景が浮かびます。まさに現代の心の砂
漠化がうまく表現されています。

安井 三緒

ひらがなでしゃべるAI重信忌
月光の投網のかかる枯蓮
雪しんしんフランス積み赤レンガ
天と地を丸洗いして風光る
古稀傘寿卒寿と生きて一重帯
東 國人 152 5
坂間 恒子 153 8
五味ちひろ 153 9
椎名 鳳人 154 2
中山 皓雪 154 3

青春の歌手は卒寿に大夕焼

田の神の息ぎつしりと今年米

富澤さち子 155 4
宮下 奈緒 155 4

三浦 侃

福笑い五臓六腑は非対称
子鹿群るダウン症児の追いかける
デジタルの都会は積木鮫動く
ビー玉のころがつてくる原爆忌
鵬猛る俺の骨ならくれてやる
草引けば要の石に朝が来る
田の神の息ぎつしりと今年米
ビー玉のころがつてくる原爆忌
千葉 信子 155 4
宮下 奈緒 155 4

今年のノーベル平和賞は、日本被団協が受賞
した。被爆者の立場から核兵器廃絶を訴え続け
てきた。核兵器が使用されると人類は滅亡する。
まさに（ビー玉だけが転がっている世界になる）
掲句は核廃絶を問いかけている。

飯塚 宣子

白菜や母の高さで塩を振る
水の綺麗日溜りの綺麗冬さくら
石楠花の寺に移した住民票
月光の投網のかかる枯蓮
半円の風光り合う眼鏡橋
処暑過ぎの踵を軽く夕空へ
調律は自由海の日が鳴る
新江 堯子 155 5
木之下みゆき 155 5
秋谷 菊野 152 3
荒木 洋子 152 4
澤田 寿一 153 8
坂間 恒子 153 8
椎名 鳳人 154 2
野口 京子 154 3
宮下 奈緒 155 4
山崎 幸子 155 4

青春の歌手は卒寿に大夕焼
不器用だけどほづきは鳴らせませす
よく動く奏者の眉やクリスマス
老いながら半透明に晩夏逝く
加齢という妙薬を得て午睡かな

松澤 伸佳

川岸の迷路のような夏料理
種袋振れば未来の音がする
冬銀河秘密のひとつ投げてみる
言問を渡りきる時虹二重
ビー玉のころがつてくる原爆忌
月見草きのうの錆びた昼がある
春潮に磨かれてる舳い船

林 ゆみ

思いだすたび新しい雪降れり
花冷えやこんなに重いボールペン
森の婚はじまる烏瓜の花
春光のなかの野鯉や兜太の忌
星たちの語る震災三月来
月におります電話に出られません
調律は自由海の日、海が鳴る

森井美恵子

ヴィーナスの幻肢シャインマスカット
若水の鎮まりて山映りくる
たましいのはじめのみどり芹薺
梟の眼のなかにゐる動けない
徘徊の途中葱坊主と遊ぶ
月見草きのうの錆びた昼がある

富澤さち子 155 4

宮本美津江 155 4

安井 三緒 155 5

山中 葛子 155 5

天野 清昭 155 5

岡田美美子 152 2

國分 三徳 152 2

新江 堯子 152 4

鈴木 瑩子 153 8

千葉 信子 154 2

羽村美和子 154 3

中村 博子 154 3

渡辺 澄 152 3

倉岡 けい 152 5

石井紀美子 152 5

清水 伶 153 9

早乙女洋子 153 9

浪岡 玄 154 3

木之下みゆき 155 5

池田 博臣 152 2

多胡たかし 153 8

清水 伶 153 9

千葉 信子 154 2

細根 葉 154 3

羽村美和子 154 3

秋灯や一人芝居の椅子一つ

天野 清昭 155 5

小川トシ子

蜘蛛の糸平和はいつも宙ぶらりん
森の婚はじまる烏瓜の花
煩惱の捨て所なく懐手
東京に空あり燕飛ぶために
月見草きのうの錆びた昼がある
能登瓦黒きが哀し雪散れり
老いながら半透明に晩夏逝く

金子 未完 152 4

石井紀美子 152 5

鈴木まんぼう 153 8

松村 五月 154 2

羽村美和子 154 3

山口 彩子 155 4

山中 葛子 155 5

金子 未完

乱丁の少女期ボインセチア真つ赤
落書の革命の詩月冴ゆる
焼き芋のぬくもりほどの吾が無上
通信簿見せ合う仲間柿若葉
しゃぼん玉天上はごも自由席
春が来た持ち物全部に名を入れて
秋の蜘蛛文士は糸を吐き続け
焼き芋のぬくもりほどの吾が無上

小野富美子 152 3

川守田美智子 152 3

なかもと淑子 152 5

島 隆史 154 2

徳吉洋二郎 154 2

保坂 末子 154 3

木之下みゆき 155 5

仏語の「無常」ではなく、「無上」――この上
もないことを持つてきたところが英知だ。
理屈など無用である。黄金色のほかほかした
芋を手にし、味わう時こそ極上の幸せであった。
貧乏だった昭和を生きてきた人の魂の句だ。

多胡たかし

この星の青さいつまで桜散る
農機具を手放すと決め零余子めし
森の婚はじまる烏瓜の花
石榴掬ぐ空は神代の青さなり

池田 博臣 152 2

大庭 芳郎 152 4

石井紀美子 152 5

中嶋 三雄 154 2

楼蘭はいまもまぼろし黄砂降る
調律は自由海の日、海が鳴る

山口 彩子 155 4

秋灯や一人芝居の椅子一つ

木之下みゆき 155 5

秋灯や一人芝居の椅子一つ

天野 清昭 155 5

そう大くない劇場か、演目は何、演者は誰、
スポットライトの当たる椅子一つに焦点を絞り
舞台の奥行きと神秘性を深め、観客の期待と想
像を広げ、開演を待つ緊張感を一層高めていま
す。

天野 清昭

窪田 俊作

煩惱の捨て所なく懐手
極楽でも地獄でもなく日向ぼこ
鉦叩チラシの裏のラブレター
馬の目に逃水見えてるかしら
ビー玉のころがつてくる原爆忌
月におります電話に出られません
秋の蜘蛛文士は糸を吐き続け

鈴木まんぼう 153 8

鈴木まんぼう

松澤 伸佳 154 2

並木 邑人 154 2

千葉 信子 154 2

浪岡 玄 154 3

木之下みゆき 155 5

秋の雨ねずみ泣きする博多帯
送り仮名のようなやさしさ滴れり
梟や記憶つぎはぐ針ひとつ
春光あまねしわが残生の雑木山
轉りのなかあざやかな人嫌い
太陽を抱きて果てる油蟬
村雨来の一喜一憂はいはいはい

泉 志眞子 152 3

石井紀美子 152 5

石井 浩美 152 5

高木 一恵 153 8

塩野谷 仁 153 9

重田 忠雄 153 9

山中 葛子 155 5

飯島 昭子 152 2

鈴木まんぼう 153 8

群れとんぼ母追ふやうに風を追ふ
煩惱の捨て所なく懐手

鈴木まんぼう 153 8

福田志津子

原点に帰る他なき裸木よ
菅ノ谷文子 153 8
天と地を丸洗いで風光る
椎名 鳳人 154 2
白髪と夏草に囲まれ息高し
三上 啓 154 3
能登瓦黒きが哀し雪散れり
山口 彩子 155 4
村雨来る一喜一憂はやいはやい
山中 葛子 155 5
白髪と夏草に囲まれ息高し
三上 啓
中七の長さも気付かぬ心意気に押されいた
きました。

東 國人

古日記悲しきことは一行に
飯島 昭子 152 2
風の夜のホットミルクと修司の詩
川守田美智子 152 3
退屈を持て余しおり夜の雛
菅ノ谷文子 153 8
約束を積みすぎたのか飛花落花
橋本志津子 154 2
青春の歌手は卒寿に大夕焼
富澤さち子 155 4
だしぬけに月が綺麗と言はれても
宮本美津江 155 4
長雨にふくらむアルト秋の虫
徳田 悠子 155 5
退屈を持て余しおり夜の雛
菅ノ谷文子
昼間は、お雛様は、眺める人々の喧噪の中に
身を置いてるが、夜になると真つ暗な部屋の中
に、静かに置かれてる。じつと座っている
だけのお雛様はさぞ退屈であろう。巧みに詠ん
でいる。

高木 一恵

覚醒は覚悟に続く八月尽
高桑婦美子 153 9
手を貸して欲しいジゴクノカマノフタ
高野 春子 153 9
曼荼羅を抜け出たがっている夏蚕
並木 邑人 154 2
父の日や精子保存して戦場へ
千葉 信子 154 2
古稀傘寿卒寿と生きて一重帯
中山 皓雪 154 3
村雨来る一喜一憂はやいはやい
山中 葛子 155 5

今宵名月子規居士が若返る
木之下みゆき 155 5
古稀傘寿卒寿と生きて一重帯
中山 皓雪
皓雪さんは梅が香みつる水戸二高の先輩で、
四百回を越えた地元の小室句会の代表です。
その五指のマニキュアに爪紅(つまくれなひ・
鳳仙花の異名)を想ったり：詩情も豊かな大先
達の存在にいつも励まされています。

林 みさき

この星の青さいつまで桜散る
池田 博臣 152 2
「イマジン」は榎することなし去年今年
渡邊 竹庵 152 5
生きてると能登枯露柿の便りかな
高木 一恵 153 8
見をさめは何時と判らぬ桜かな
柴田 洋郎 153 9
抗いのすがた曠野の冬すみれ
高橋 宗史 154 2
殺気なき菊人形の二本差
宮下 奈緒 155 4
銀河には顔覚えなき父の居る
山崎 幸子 155 4
「イマジン」は榎することなし去年今年
渡邊 竹庵
ビートルズのジョン・レノンが遺した「イマ
ジン」は今も、私の青春時代の記憶の一つになっ
ている。しかし、ジョンの祈りは虚しく、世界
は未だに戦争を根絶出来ないでいる。この句を
前に、曲の思いを噛み締めている。

杉山真佐子

仁右衛門島立春本当はギタリスト
秋尾 敏 152 2
凜凜と従者でありぬ冬桜
荒木 洋子 152 4
月蝕は熟れゆく果実冬の波
倉持 紀子 152 5
たましいのはじめのみどり芹薺
清水 伶 153 9
まくなぎの徒党に触れし偏頭痛
保坂 末子 154 3
月見草きのうの錆びた昼がある
羽村美和子 154 3
秋の蜘蛛文士は糸を吐き続け
木之下みゆき 155 5

戸邊 光一

裏庭の荒れし古民家路の臺
高橋 節夫 153 8
石楠花の寺に移した住民票
澤田 寿一 153 8
吊るし雛襲めつつ脈をとるナース
鈴木 房州 153 9
日本に住めるよるこび春霞
高橋 宗史 154 2
ほんとうの涙は一度冬の月
細根 栞 154 3
殺気なき菊人形の二本差
宮下 奈緒 155 4
調律は自由海の日の海が鳴る
木之下みゆき 155 5
裏庭の荒れし古民家路の臺
高橋 節夫
現在の日本の常況を見据えている。高齢化に
より亡くなった大きな家屋敷も後継者も無く雑
草にまみれ荒れ放題となり、かつては生活の一
部であった路の臺だけが詫びしい姿で語りかけ
ている。国の将来が不安である。

中西布美子

一滴を効かせ新茶の薄みどり
富澤さち子 155 4
忘るるほど旧姓遠し秋海棠
宮下 奈緒 155 4
不器用だけどほづきは鳴らせませす
宮本美津江 155 4
この先の不安をかくす夏帽子
森 孝子 155 5
嫌いでしょ開口一番春疾風
山崎 公子 155 5
加齢という妙薬を得て午睡かな
天野 清昭 155 5
白紫陽花うそつく前の深呼吸吸
鈴木卯ノ花 155 5
白紫陽花うそつく前の深呼吸吸
鈴木卯ノ花
やがてどのような嘘の彩になるのでしょうか。
オレンジ色は奥の明るい嘘黒色は底の重い嘘。
嘘は利害を併せ持ち使いたくない言葉です。そ
れにしても前に深呼吸しては、もうそれはばれ
ばれです。正直な方と感じました。

強化部だより

千葉県現代俳句協会青年部活動報告

青年部の活動内容は随時SNSのアンケートやメッセージのやり取りで決定、運営しています。フラットで居心地の良い部内です。夏雲システムによるインターネット句会を隔月実施。(次回七月) 年二回リアル吟行会実施。(春吟行は六月七日堀切菖蒲園にて開催予定) 参加希望の方はご連絡下さい。六十歳以上の方は青年部準会員となります。連絡先はこちら。

kokomiya2003@yahoo.co.jp (青年部・三宅)

第九回あしたば句会

(三月開催一人一句抜粋)

花ミモザ美男介護士やつて来る 石井 稔
 星朧マイノリティのひとつふたつ 陸野 良美
 川蜷の野望を叱る田螺かな 松本 千花
 世の中に落ちて良いのは椿だけ 佐藤 鮎美
 ヒヤシンス野蛮な君といて楽しい 鈴木卯ノ花
 白頭の教師で終わる花大根 東 國人
 春寒や遠野の河童は息災か 無 子
 きみの声聞こえているよ卒業歌 羽村美和子
 新社員自分を褒めることにする 遠藤 寛子
 佐保姫佐保姫走るな野に休め 三宅たくみ
 病む人へすりおろしりんご春障子 森井美恵子
 水温む弁当箱のなめらかさ 青野 友香
 今回は兼題「卒業」「野」に挑戦しました。フレッシュな句が並び、句評も大いに盛り上がりしました。

初心者講座 第三期

第二回・二回

足元の幸せ素通りクローバー 荻野由美子
 揚ひばり好きだと言われ好きと言う 鈴木卯ノ花
 花吹雪わたしが裸になつていく 栗原 正子
 一日に一本のバス初桜 横須賀弘子
 病床の干からびた晩春日差す 宮原 青佳
 初心者講座第三期、当初参加予定の方が転勤や体調不良などで参加出来ず、少々寂しい出発となりました。

しかし新しい仲間も加わり、早速に良い刺激を与えあっているところです。全くの初心者だった方が回を重ねるうちに、「上五中七に対して季語が近いのではと悩んだ」などと発言をされ、嬉しい驚きにみんなの笑みがこぼれます。

毎回俳句形式や修辭法や兼題の課題をこなしながら、俳句の世界を広げていきます。当日の学習テーマに合わせて著名な俳人の作品も清記用紙に並びます。やや厳しい句評の後に作者がかの俳人だと分かった時には、驚きとともに悲鳴のような笑いも生まれます。

「俳句を詠む」とことと「俳句を読む」とことは車の両輪のようなものです。両方を磨きながら俳句を楽しんでいます。途中からの参加も大歓迎です。ご一緒に楽しみましょう！
 (羽村美和子記)

《会員・会友の近況》②

・なかなか句会には行けませんが、インターネット句会を楽しんでいます。

(鈴木 房州)

・数えて百歳です。昨秋、千葉市の海と川と街の見える高齢者マンションに移住。施設内で句会発足の熱心な動きがあり、期待したが、結局はありきたりの句会で残念であった。四十年余り続けてる日本橋の自由な句会を続けます。何時まで続くやら。『現俳千葉』は楽しみの一つです。

(佐久間眞城)

谷中吟行会に参加して

・久々に春の吟行会に参加した。谷中霊園、だんだん坂から、新緑の朝倉彫塑館の別世界を堪能。句会は本行寺本堂という豪勢な行程であった。はるうらら。句友と散策という楽しさを満喫した一日でした。お世話になった皆様に感謝申し上げます。

(藤田 富江)

・天候に恵まれ谷中界限を巡り吟行句会へ。たくさんの方の支えと本行寺様のご好意で心地良い一時を過ごし、他の結社の方の句も新鮮でした。解放的な気分です。有意義で実り多い一日となりました。

(尾上 康子)

・町並や建物・路地・町名など吟行でなければ気付けない体験でした。千葉現代俳句の方々との句会は初めてでしたが、とても勉強になりました。作句に時間が足りず、反省もしきりですが、一日があつたという間の嬉しい吟行会でした。

(蔦澤佐智子)

□□津田沼研究句会報告□□

(於…津田沼一丁目町会会館)

●第三八九回(令和七年二月十一日)

司会 白木 暢子

招魂のワウーンウォーン稲荷講 並木 邑人
春光へ転ぶばかりのスニーカー 星野 一恵
若き医師の微笑めでたし冬珊瑚 高木 一恵
焼くものはみな値上がりしストーブ列車 小林 実
雪おんな化粧崩れを如何にせむ 徳吉洋二郎
二月や治りの遅い指の傷 渡辺しげ子
静かなるエンドロールや春落暉 大喜 京香
切山椒待つ母の居た小正月 なかもと淑子
栄螺語りはじめる氏・素性 栗原 正子
着膨れて皆んな行くところあるのよね 伊与田すみ
大畑忌冬夕焼を担ぎ逝く 鈴木 瑩子
喪失の続くばかりや霏々と雪 池田 博臣
山寺の小焼けに染まりゆく連翹 長井 寛
本棚はオーダーメイド福は内 増田 豊子
よいことを考えるようおでん鍋 白木 暢子
指先の余る手袋親しかり 股野 久子

□□青葉研究句会報告□□

(於…千葉市民会館)

●第一六四回(令和七年四月二十四日)

司会 並木 邑人

逃げ水の果ても逃げ水ウクライナ 鈴木まんぼう
わたしからわたししが逃げる遠霞 石井紀美子
逃げ水や芭蕉西行寅次郎 徳吉洋二郎
逆光の兵の逃げ込む麦畑 越野 雄治
少年が逃げるもの追ひ春の闇 加賀谷秀男

□□柏研究句会報告□□

(於…柏市「ハックルベリー書店」2階)

●第一五〇回(令和七年五月十日)

司会 岡田 春人

末黒野の大統領の陰陽道 藤好 良
五月雨の大河を見つむ芭蕉像 長井 寛
昭和の日赤紙のなき八十年 岡田 春人
爆笑の薔薇の花びら真つ赤つ赤 小野 功
串刺しの栄螺風ごと売られけり 野口 京子
うつし世を尻から眠る鬱の象 松澤 龍一
飛び箱の皮の匂いや新学期 下村 洋子
甘美な郷愁昭和の桜花ながれる 高橋 宗史
鶴鶴はきれいな過去を拾いゆく 木之下みゆき

□□君津研究句会報告□□

(於…君津市生涯学習交流センター)

●第六十一回(令和七年四月三日)

司会 越野 雄治

春光や舗道はばら組・ひよこ組 村田 満枝
菜種梅雨籬の落ち着く醤油樽 山田たかし
部活の子花菜の風を抜いて行く 石井紀美子

□□いすみ安房研究句会報告□□

(於…御宿町・徳田悠子さん宅)

●第七回「御宿吟行会」(令和七年三月二十九日)

司会 東 國人

さざ波の永遠に現在落椿 坂間 恒子
春寒の二体の虚像砂に立つ 柴田 洋郎
黒潮に砂を重ねて駱駝の瞳 徳田 悠子
花の雨母国語溶け出しています 並木 邑人
大陸的な駱駝のまなこ春時雨 木之下みゆき
椰子の木の花まで染める桜雨 白木 暢子
海底は修羅の坩堝ぞ春の海 吉田 耕史
春の雨駱駝の腹をみな叩く 東 國人
骸骨の弾くバイオリン春の雨 羽村美和子
春雨のしみ込む月の沙漠かな 高橋 宗史

強東風吹く雨に鎮火の大船渡 長濱 聰子
遊郭へ誘う様に夕桜 大地 節子
舟でゆく野菊の墓や涅槃西風 徳吉洋二郎
余生てふ終列車待つ春の宵 森 孝子
愛しきは花より生まる詩どころ 長井 寛
生還の車椅子押す春の風 田沼美智子
口中の飴を噛む癖鳥曇 越野 雄治
戦などやつてられない聖五月 羽矢 眞人
頼杖の思案の行方花ぐもり 前田 孝子
春の風弱き母への盾となる 佐藤 鮎美
座標軸大きくずれる春疾風 泉 志眞子
春の雪風魔小太郎小躍りす 並木 邑人
残り鴨奇声を発す水面かな 古賀 壽昭
美の巨人詩人道造風信子 北野 耕兵
風よ風卒業という風と風 東 國人
猫のいる切符売場や風信子 小澤 富子

四十五周年記念基金参加御礼(三次)

(一口二千元・敬称略・五月二十一日現在)

- (一口) 徳田悠子・松村五月・遠藤寛子
- (二口) 三宅たくみ
- (二・五口) 高橋 博
- (五口) 鈴木まんぼう・白木暢子
- 中村博子・佐藤禎子・星野一恵
- (十口) 鈴木瑩子
- (十五口) 渡辺 澄
- (二十五口) 山中葛子・羽村美和子

※基金一次分 一四〇、〇〇〇円
基金二次分 二三六、〇〇〇円
基金三次分 二一五、〇〇〇円
計 五九一、〇〇〇円

基金募集期間 令和七年十月十日

払込先 千葉銀行 稲毛東口支店

普通預金 3889475

口座名 千葉県現代俳句協会 会計 松本千花

●皆様方の温かいご芳志に厚く御礼申し上げます。目標額達成へ、会員・会友の皆様の支援を引き続き、よろしくお願いいたします。

■創立四十五周年記念

俳句大会と作品募集

大会期日 令和七年十月十二日(日)

大会会場 千葉市文化センター

記念講演 池田 澄子 先生

俳句募集 二句一組・千円(未発表作品)

何組でも可。

投句締切 令和七年八月十九日(火)

※詳しくは同封のチラシをご参照ください。

図書紹介

■句集「十七会」 長井 寛

令和七年二月四日 現代俳句協会刊
須弥山の絶巔を越ゆ千羽鶴
齢いま蘭なるや草の花
透きとおる一句一章雁の列

掲示板

《会員・会友異動》

●逝去 (会員) 西垣左京・加藤法子
●退会 (会員) 岡崎 翠・萱原泰子

五味ちひろ・山崎文子
島田翠松・矢野忠男

●新会員・新会友

百瀬 一兎 (会員) 大石雄鬼 紹介
寺田 寺彦 (会員) 戸川 晟 紹介

《令和七年度第二回幹事会》

日時 令和七年五月二十日(火)午後一時より
場所 船橋市勤労市民センター

議題

- 一、令和七年度総会・句会の結果報告
- 二、令和七年度春の吟行会(谷中)の結果報告
- 三、秋の吟行会について検討
- 四、創立四十五周年記念俳句大会について
- 五、一般社団法人現代俳句協会(本部)の動向について
- 六、青年部活動報告
- 七、初心者講座について
- 八、会報一五七号について
- 九、各研究会の状況
- (青葉・津田沼・柏・君津・いすみ安房について

九、SNSでの告知事項等の発信について
十、その他

①令和七年度後期・八年度前期予定について

②会員・会友動静

③緊急連絡網

④次回幹事会 八月十九日(火) 予定

お詫びと訂正

・前号一五六号 六頁 いすみ安房研究句会報告
(誤) 吉田耕司 ↓ (正) 吉田耕史

□□事務局・編集部だより□□

●当協会ではこの秋の創立四十五周年記念俳句大会に向けて、羽村新会長を中心に準備を進めております。一人でも多くの皆様にご参加いただき、大会を大いに盛り上げていきましょう。投句締切、八月十九日(火)です。

現代俳句千葉 第一五七号

令和七年六月一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会

会長 羽村 美和子

現代俳句千葉編集部

〒278-0037 野田市野田

六七七-一A二二五

木之下みゆき

千葉県現代俳句協会事務局

〒299-2521 南房総市白子六七三-一

東 國人

TEL 〇四七〇-四六-二九一五

FAX 〇四七〇-四六-三〇七二